法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

「Y日記」から見たサンパウロ州の日系農業小生産者の生産と生活(4)プルデンテ市近傍の日系農業小生産者の2次的集団地「ミネのムラ」の社会経済的性格

西川, 大二郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

94

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

91

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

https://doi.org/10.15002/00004598

「Y 日記」から見たサンパウロ州の日系農業 小生産者の生産と生活(4)

---プルデンテ市近傍の日系農業小生産者の 二次的集団地「ミネのムラ」の社会経済的性格---

西 川 大二郎

目 次

- 1. まえがき一問題の所在一
- Ⅱ.「ミネのムラ」の経済的性格の概略
 - (1) 日系農業小牛産者集団地の形成
 - (2) 「ムラ」の人口構成
 - (3) 「ムラ」の構成員の土地所有規模と農業経営類型
- Ⅲ.「Y 日記」から見た日系農業小生産者の生産と生活の様態
 - (1) Y 氏の生活史
 - (2) 「Y 日記」の小さな解説
 - (3) 「Y 日記」記入費目の吟味
 - (4) 「Y日記」の分析のための費目の分類
 - (5) 全費目についての分類, 整理の結果
 - (6) 農業生産について
 - (7) 家計支出について
- IV.「ミネのムラ」の生活様式と社会経済的特性
 - (1) 構成員の出身地
 - (2) 婚姻関係
 - (3) 雇用関係に見られる人種, 民族問題
 - (4) 「日本語」学校教育

(以上前号)

(5) 宗教生活

(本号)

(6) 文化生活

(以下次号)

- (7) 社会集団の特性
- (8) 生活圈
- V. 結 び

承 前

Ⅳ. 「ミネのムラ」の生活様式と社会経済的特性

(5) 宗教生活

① 宗教的支出について

昭和20年1月8日 仏事習物

まず、「Y 日記」から Y 家の宗教的支出の内容と年次的推移を知るために、 墓参、法事等の記録を年次順に拾い上げて連記してみよう。

21661 クルゼイロ

| 昭和20年1月8日 | 14.争員物 | 7 1,001 2 ルセイロ |
|------------|------------------|--------------------------|
| | (含プルデンテ行自動車 | 墓地行自動車 360 クルゼイロ) |
| 昭和20年1月15日 | 仏事ガラナ 1 袋 | 170 クルゼイロ |
| 1月23日 | 仏事菓子代 | 100 クルゼイロ |
| | 天皇陛下御真影 | 20 クルゼイロ |
| 2月5日 | プルデンテ買物行 | |
| | 墓地行自動車 | 30 クルゼイロ |
| | 御経代 | 50 クルゼイロ |
| | 弘法大師掛軸代 | 40 クルゼイロ |
| 4月19日 | マルチノポリス行 | |
| | O氏仏事御仏前 | 70 クルゼイロ |
| 4月24日 | マルチノポリス行 | |
| | O氏仏事 | 205 クルゼイロ |
| 10月31日 | 花輪 2 個 | 80 クルゼイロ |
| | 線香・ロウソク3個 | 60 クルゼイロ |
| | 墓番渡し | 5 クルゼイロ |
| 11月2日 | プルデンテ墓参り | |
| 昭和21年10月5日 | 碑入金石屋相渡し | 2,000 クルゼイロ |
| | 亡地願記 (ママ).(祈り) 代 | 100 クルゼイロ |
| 11月2日 | 盆 プルデンテ市墓参り |) |
| 昭和22年2月1日 | SS 氏墓碑代支払 | 2,500 クルゼイロ |
| 11月1日 | プルデンテ墓参り おる | 計買物使金 〆 850 クルゼイロ |
| | | |

| 昭和23年9月18日 | TS 死亡 プルデンテ行 棺一式 | 500 クルゼイロ |
|------------|-----------------------|---------------|
| 11月1日 | プルデンテ行盆買物使金 | |
| | (知人盆花輪料3点) | |
| (筆者註: | : この年は、子供や父の病気のため墓 | 参なし) |
| 昭和24年3月21日 | 弘法大師 菓子1キロ | 15 クルゼイロ |
| 11月2日 | 盆日墓参りプルデンテとアニュウマス | ✔ 520 クルゼイロ |
| 昭和25年3月21日 | 弘法大師 上仏 | 20 クルゼイロ |
| 11月2日 | プルデンテ墓参りアニュウマス墓参り | 〆 350 クルゼイロ |
| 昭和26年9月30日 | 弘法大師サンパウロ市寄付金出 | 200 クルゼイロ |
| 11月2日 | アニュウマス盆墓参り | ♂ 1,000 クルゼイロ |
| | (含 芸能見 入場券5人分 300ク | ルゼイロ) |
| 昭和27年4月25日 | マシャード弘法大師寄付 | 100 クルゼイロ |
| 7月11日 | プルデンテ東本願寺より大谷裏方様 | |
| | 観辺費出 | 300 クルゼイロ |
| 8月21日 | T 宅天理教会上金 | 50 クルゼイロ |
| 9月21日 | 寺晚餐会 | 100 クルゼイロ |
| 9月22日 | 寺寄付金 | 1,500 クルゼイロ |
| 9月26日 | 東本願寺御法要おこぞり? 2人分 | 200 クルゼイロ |
| 9月27日 | 東本願寺御供養代 | 300 クルゼイロ |
| 9月28日 | 本願寺と共に仏教会(記念写真代等) | 118 クルゼイロ |
| 10月 4 日 | プルデンテ行 大谷法主並びに御裏方様 | 80 クルゼイロ |
| 11月1日 | アニュウマス墓参り 盆 | 250 クルゼイロ |
| 12月 1 日 | サンパウロ市西本願寺3人分寄付 | |
| | リッファ・・ | 150 クルゼイロ |
| 昭和28年1月27日 | 天理教会上 | 10 クルゼイロ |
| 11月1日 | 盆墓参りアニュウマス(兄一家) | 1,200 クルゼイロ |
| | 盆墓参りプルデンテ(弟一家) | 100 クルゼイロ |
| 12月20日 | プルデンテ市本願寺来る。父御寺御 | |
| | 布施 | 100 クルゼイロ |
| 昭和29年2月17日 | プルデンテ市本願寺公師 (ママ) 御布施料 | 50 クルゼイロ |
| | 自動車賃2人分払い | 20 クルゼイロ |
| | 御賽銭上 | 3 クルゼイロ |

| 2月18日 | プルデンテ市本願寺参り 自動車賃 | 15 クルゼイロ |
|------------|---------------------------|-------------|
| 4月18日 | プルデンテ市真宗本願寺参り | |
| | 御布施上野袖子公史 (ママ) | 100 クルゼイロ |
| | 御布施 | 20 クルゼイロ |
| | 自動車賃払 | 20 クルゼイロ |
| 4月19日 | 寺参りプルデンテ市 御布施上 | 20 クルゼイロ |
| | 御教本払い | 20 クルゼイロ |
| 5月11日 | U 女史御布施出 | 50 クルゼイロ |
| 5月13日 | アルバレス弘法大師寄付金 | 150 クルゼイロ |
| 7月13日 | プルデンテ市本願寺寄附金 | 1,500 クルゼイロ |
| | 7月16日 御光師 (ママ) 晩餐会出1人 | |
| | 前払 | 100 クルゼイロ |
| 7月15日 | プルデンテ市本願寺御法要出 2 人分 | 100 クルゼイロ |
| 7月17日 | 本願寺より仏様御受料 | 200 クルゼイロ |
| | サンパウロ観世音様寄付出 | 500 クルゼイロ |
| 10月9日 | プルデンテ本願寺賞品 | 200 クルゼイロ |
| 10月10日 | プルデンテ本願寺上棟式 | |
| | 相撲者寄附金出 | 200 クルゼイロ |
| | 贈りカンジン元出 | 100 クルゼイロ |
| | 相撲者花出 | 50 クルゼイロ |
| | 供 花 | 30 クルゼイロ |
| | 相撲者花出 | 30 クルゼイロ |
| 11月1日 | 盆 | |
| | ベンセブラ ^(ママ) 墓参り | 300 クルゼイロ |
| | ベンセブラ (ママ) 墓参り | 50 クルゼイロ |
| | アニュウマス墓参り御墓塗り代 | 100 クルゼイロ |
| | 自動車代5人分払 | 60 クルゼイロ |
| 11月2日 | 父プルデンテ御墓参り使金線香蠟燭代 | 16 クルゼイロ |
| | 自動車代 5 人分払い | 32 クルゼイロ |
| 昭和30年1月12日 | サンパウロ観世音佛上 | 300 クルゼイロ |
| 3月20日 | 父プルデンテ本願寺行 | |
| | 仏教会女子寄付金 | 100 クルゼイロ |
| | | |

| | 本願寺仏教教会会費 | 100 クルゼイロ | | |
|--------------------|---------------------|---------------|--|--|
| 3月24日 | プルデンテ本願寺行 本願寺御布施上 | | | |
| 3月27日 | 天理教会神上 | 5クルゼイロ | | |
| 4月8日 | プルデンテ本願寺参り佛上 2 人分 | 20 クルゼイロ | | |
| 4月9日 | 仏教女子青年会寄附金 | 100 クルゼイロ | | |
| 4月23日 | 本願寺結婚式御祝儀出 | 100 クルゼイロ | | |
| 6月20日 | プルデンテ 寺御布施出 | 50 クルゼイロ | | |
| 7月16日 | 本願寺興業 (ママ) 相撲花 | 200 クルゼイロ | | |
| 7月17日 | プルデンテ寺行 相撲御花(9件) | 220 クルゼイロ | | |
| 7月25日~8月中旬 サンパウロ市行 | | | | |
| | 本派本願寺佛様上 | 30 クルゼイロ | | |
| | 上観世音参り | 30 クルゼイロ | | |
| 9月14日 | プルデンテ行 本願寺寄付 | 1,500 クルゼイロ | | |
| 9月25日 | 御ヒガシ (ママ) 寺参りプルデンテ市 | | | |
| | 本願寺行 | 50 クルゼイロ | | |
| | 寺御布施料 | | | |
| | 敬老会 寸志 | 200 クルゼイロ | | |
| | 仏教青年会花 | 100 クルゼイロ | | |
| | 2人自動車賃 | 20 クルゼイロ | | |
| 9月28日 | 御布施 日本よりの派遣僧上出 | 100 クルゼイロ | | |
| 10月15日 | プルデンテ行 父払本願寺敬老会写 | į. | | |
| | 真代 | 50 クルゼイロ | | |
| 11月1日 | アニュウマス盆墓参り | √ 1,050 クルゼイロ | | |
| | プルデンテ墓参り | ✓ 170 クルゼイロ | | |
| | プルデンテ墓参り | ✓ 150 クルゼイロ | | |
| | プルデンテ市 本願寺僧御布施出 | 200 クルゼイロ | | |
| 11月27日 | プルデンテ本願寺行 | | | |
| | 御布施出 | 50 クルゼイロ | | |
| | 佛上(さい銭) | 2クルゼイロ | | |
| | 靖国神社出 | 50 クルゼイロ | | |
| 12月23日 | プルデンテ市買物行 | | | |
| | 本願寺御布施出 | 50 クルゼイロ | | |
| | | 以上 | | |
| | | | | |

② 「墓参り」について

上記の記録から知れることが、いくつかある。

まず「墓参り」が、極めて確実に行われていることである。支出の記録ということからすると、それは10月31日から11月2日の間に行われている。

ブラジルで最も広く行きわたっているカトリックの習俗によれば、11月2日が「フィナードの日(Dia de Finados)」といわれ、フィナードつまり死者・故人に親しかった人々が故人の追憶に捧げる日(consagrado memória dos mortes)とされ、家族・友人・知人が墓参をする。Y氏はカトリック教徒ではなく、後に述べるように、むしろ真摯な仏教徒であるが、この「Y日記」の記録で知れるかぎりでは、「フィナードの日」の「墓参」をほとんど欠かしたことがない。しかも記録には、日本の祖霊供養の日に擬してこの日を「盆」と記載している。盆は正式には「盂勘盆会」であり、祖霊供養の法会として、日本に広く定着している日本仏教の宗教的行事である。そしてそれは日本では7月15日を中心に、または月遅れと称して8月15日を中心に行われているが、現在「旧盆」と呼ぶ陰暦7月15日を中心に行われるものが本来のものである。もし、日本の行事がブラジルに持ち込まれているとすれば、7月ないし8月に何らかの祖霊供養の行事が行われていると予想されるが、「Y日記」を見るかぎり7・8月の行事は消え、フィナードの日が明らかに「盆」に代替されている。

ところで「Y 日記」が記録されている昭和 20(1945)年~昭和 30(1955)年の期間には、Y 氏は、近い親族に故人をもってはいない。墓参はマルチノポリスとアニュウマスとプルデンテの都市または町の公設墓地について行われている。これらの土地は、すでに述べたように、Y 氏がこれまで入植・開拓で歩んできたところである。マルチノポリスは 1930 年から 35 年までの間コーヒー樹のフォルマドールとして働いたところであり、アニュウマスは、1935から独立自営農として、1947 年にこの「ミネのムラ」に来るまで、綿作とハッカ作りにいそしんだところである。その間に作られた人間関係が、この墓参の前提にある。特にアニュウマスには、Y 氏の夫人の実家がある。プルデンテの墓地には「昭和拾九年拾弐月廿一日 SS 氏死亡、プルデンテ墓地番号五千九百〇三番地」と日記にも記載され、その後の葬儀・墓地の準備・建設までを遺族に任せられたアミーゴと呼ばれるほどの友人の墓がある。したがって、この墓参は祖霊供養という日本における仏教行事の「盆」よりは幅広く友人・

知人までも含めた内容を持ち、内容においては幾分異なっている。

このような転移・変容が如何にして行われたかは、興味あるところである。 そこでまず Y 氏の日本の出身母村における祖霊供養について知ったことを述 べよう。

③ Y氏の出身母村における祖霊供養について

Y 氏の出身母村は、先にも述べたように、現在の福岡県田主丸町の1集落である。この町及びその周辺での聞き取りによれば、この地域の「盆」ないし「先祖祭り」は次のようなものであった。

「盆」の行事は、近隣の池尻村の阿弥陀寺(天台宗)では、町方は、8月13日に精霊を迎え、16日に精霊を送り、または雲雀川で精霊流しをする。村方は、8月15日の夕方、精霊送りという意味で墓参りをする。初盆では、提灯を一つ持っていって、蠟燭がなくなるまで下げて置く。今は、真宗関係が多く見られることであるが、納骨堂に参拝するだけになった。近隣の大分県日田市では、盆は新暦の8月13日から15日に行う。このことから、この地域ではおおむね新暦のいわゆる月遅れに「盆」の行事が行われていることが推察される。

田主丸町での「先祖祭り」は「むら」集落の名姓ごとにやる。それについての墓参の時期は、新暦の 4 月 10 日から 15 日の間である。 Y 家の先祖祭りは 4 月 15 日である。その頃は、春の桜の時期にあたる。「むら」集落の家は、Y、 T、I、N 等の名姓に分かれ、名姓ごとに、つまり同姓の家の者が、家の墓とは別に先祖墓を持つ。 Y 家の先祖墓には「黒田周道」と刻まれている。 I 家のものは 250 年前のものという。

「先祖祭り」の墓参にあたっては、当番の家で豆や煮しめを作り、女の人が 寄って話し合いながら食事をする。姓によっては(H 家の場合)男が寄って 酒を飲む。かつては、先祖祭りには皆が集まった。しかし、今では、代表3人 が茶を上げて、寺で法要(供養)するというように簡略化された。

各「むら」集落には寺がある。そして、麦生では、入徳寺が10名くらいの門徒を持ち、常行寺(真宗)が50戸くらいの門徒を持ち、麦生の隣の竹野は麦生の分かれであるが、そこの西名寺にはY姓の家が5~6 軒属しているというように、各寺は各々門徒を持っている。いわゆる寺檀関係が見られる。

これらの事実を見ると、「墓参り」の日が、本来の「盆」が行われる7~8月

になく、また Y 氏の母村の「先祖祭り」が行われる 4 月を離れて、ブラジルのカトリックの習俗である 11 月 2 日の「フィナードの日」に転移、変容したことは明らかであろう。

④ ブラジルと日本の「墓参り」の意味づけ

まずカトリック教徒にとっての墓の意味を考える。

墓の意味付けはもちろん死生観と関わりを持つ。しかし、筆者はここでキリ スト教の神義論を厳密に論ずるだけの知識を持ち合わせていないし、またその 必要はないだろう。ただし、少なくとも次のことだけは言えるだろう。世俗の 一般的キリスト教信者は「死後、死者の魂は神に召されて天国に生まれ変わ る」と信じている。そこに至るまでの間の神の審判についての見解はさまざま あるとしても、如何なる審判を受けるかは個人と神との関係の中のことであ る。周辺の血縁者や、ましていわんや知人・友人の関わることではない。魂が 天国に至るまでの過程についての考え方は、多分、葬送・葬儀の場面に反映さ れるだろう。筆者は、ブラジル滞在中に、カトリックの葬送・葬儀の場に参加 し、またある時は、カトリック教徒であるドイツ系ブラジル人の葬儀に際し て、遺体を墓地に埋葬する場に知人として立ち会うことになった経験を持って いる。ブラジルのカトリック教徒は、基本的に土葬である。死者儀礼の場面で は、エンバーミング embalming、embalsamamento の風習として知られて いるように遺体に化粧を施し、またそれを盛装し、あたかも生きているように して葬儀を行い、また埋葬する。遺体が土にかえるだけの時間がたった後、再 埋葬するという。墓石は盛大に飾り立て、故人の生前の写真やリリーフを埋め 込み、また賛辞を刻む。

「フィナードの日」は、ブラジル語の辞典の解説では "Consagrado à memória dos mortes" とある("Novo Dicionário da Língua Portuguesa, Aurélio Buarque, 1971, Rio de Janeiro.)。consagrar には[祝聖する・奉献する」という意味があるから、解説はどちらかというと「故人の生前の人柄・業績を讃え偲ぶ」ことを意味する。墓は遺骨を納める場所というより「死者の生前の姿、すなわち肉体を記念し追憶するための場所」(山折哲雄『仏教とは何か』中公新書、1993 年、173 ページ)として機能する。つまり、「フィナードの日」の墓参りには、日本の墓参りのような神道的鎮魂・仏教的供養の意味は少ない。したがって、日系人も墓参りに際しては、一般のブラジル人の

ように花で墓を飾ることはあっても、墓前において読経といった目立った墓供養などの行事は慎み、日常的供養は「墓参り」とは別に各家で行われた。ブラジルでこういう話を聞いた。YM(田主丸町の出身)、嫁 T 子、読経を頼んでも寺がないので、自分で経をおぼえたという。

それに対して、仏教と儒教と神道が複雑に習合し、それに個々の民間習俗がかかわる日本の文化における墓の意味についての個別の民俗学的研究のなかから普遍的な結論を出すことは、現状においては困難である。宗教学のほうは、個々の教義について論じたものは多いが、それと民間の庶民の生活感としての宗教意識とは必ずしも結びつかない。しかし、最近、1987年から3年間にわたって行われた「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」(略称「東アジア比較研究」)の中で、「儒教文化圏の歴史と社会」班に属して参加し、班の責任者を勤めた加地伸行教授が『儒教とは何か』(中公新書、初版、1990年)という一書を物されている。また、同じ出版社から同じような企画で、山折哲雄『仏教とは何か』(中公新書、1993年)が刊行されている。この両者は、筆者の読後感として言えば、宗教の教義の説明に止まらず、それと庶民の生活感としての宗教意識、また宗教と民間習俗との関係を解き明かしてくれた見事な啓蒙書とはいえる。

この二書を中心にして、墓の意味づけを、私なりに読み取って、誤解を恐れずに整理してみると、次のようになろうか。

まず、仏教はこの世を苦しみの世界とする。「生・老・病・死」である。肉体の死とともに、霊魂は浮遊する。肉体は抜け殻であるから、茶毘に付す。仏教の本来の立場に立てば、お骨、また遺体には意味などはなく、山にでも川にでも捨てるべきものであり、本来は「墓」を作ることはない。霊魂は「中陰」に浮遊し、「因果応報」の原理にしたがって「輪廻転生」する。「中陰」の間、霊魂が次の世で少しでも良い所に「転生」できるように、僧を通じて「供養」する。ブッダの開いた仏教教義の中心には「無」と言う思想があるが、それは永遠に続く「輪廻転生」からの「解脱」を意味している。

それに対して、儒教は、この世を楽しい所と考えた東アジア・中国人の感覚に上に成立していると考える。「苦」の世界でなく「楽」の世界である。「いくら現世の快楽をつくそうとも、いずれ必ず死が訪れる。現世こそ最高とする中国人にとって、これは大変つらいことである。インド人やキリスト教徒のよう

に来世や天国を信ずることができるものにとっては、この世は仮の世に過ぎないから、死もまたその過程の一つに過ぎない。神仏の思し召しと思えば、死の不安も恐怖もない。しかし、現実のこの世しかないと考える中国人にとって、死は大変な恐怖である。とすればその死を恐くないものとして何とか納得できるように説明してほしい、と中国人が願うのは当然である。その説明を成功したのが儒教なのである」という。

その説明の根幹には招魂儀礼という、呪術的観念のなかの再生理論がある。つまり、「生者は魂(精神の主宰者)と魄(肉体の主宰者)が一致した状態である。」とする。そして「肉体の呼吸停止が始まると、一致していた魂と魄とが分離し、魂は天上に、魄は地下へと行く。これが死である。」とする。理論的に言えば、「逆に、分離した魂と魄とを呼びもどし、一致させると〈生の状態〉になる。」その儀礼が招魂儀礼である。魂をどこに呼びもどすかというと、それは頭骸骨であり、遺骨であり、帰り来る場所としての形代であり、その後それは木の板となり、神主あるいは木主と呼ばれ、中国人はこれを死者になぞらえて祭る。「この神主が仏教に取り入れられて位牌となった。」という。

招魂儀礼とは、祖先崇拝そして祖霊信仰を根核とする。というのは、まず「祖先の祭祀=招魂儀礼をするのは子孫である現在の当主であり、この当主もいずれは死んで祖霊となるとすれば、祖先の祭祀を続けてくれる一族が必要となる。そこで祖先の祭祀・父母への敬愛・子孫を生むこと、それらの三行為をひっくるめて〈孝〉という規範とした。」つまり、「孝を行うことによって、子孫を生み、祖先・祖霊を再生せしめ、自己もまたいつの日か死を迎えるのではあるけれども、子孫・一族の祭祀によってこの世に再生することが可能になる。」さらにいえば、「自己の生命とは、実は父の生命であり、祖父の生命であり、さらに、実は遠くの祖先の生命ということになり、」……それと対照的に、子孫に対して、「自己は個体としては死ぬとしても、肉体の死後も子孫の生命との連続において生き続けることができることになる。つまり、孝の行いを通じて、自己の生命が永遠であることの可能性に触れうるのである。そう考えれば、死の恐怖も不安も解消できるではないか。永遠の生命一これこそ現世の快楽を肯定する現実的感覚の中国人の最も望むものであった。」という。

仏教思想の中には本来、墓を建てる考えはない。仏教の基層のヒンドゥー教や、またイスラム教の世界にも墓はない。山折氏の説では、「ブッダは、遺骨の供養(崇拝)にかかずらうな、と言っているのに、ブッダの遺体は火葬に付

され、遺骨は八つに分けられ、遺骨はストゥーバ(塔)に安置され、遺骨=仏舎利に対する供養が始まったと言う。それは、弟子の裏切りによるものであり、逆説的にいえば、そのことによって仏教が始まった。」という。しかし、加治氏の説によれば、「無」の思想の仏教は、中国に入って現世的思想の儒教と微妙に習合した。そして、仏教が、東アジアの土着的祖先崇拝の思想を受け入れたことが、また、遺骨供養・遺骨信仰・位牌・墓信仰・墓供養等、儒教的儀礼の形式の多くを取り入れて、習合したことが、仏教の普及の大きな要素であったという。

少なくとも、日本に伝播した仏教は、このような習合を経たものであった。そして、それがまた日本の土着的神道の思想と習俗との間で習合を遂げた。

山折氏の著書の中で、「四章 日本仏教の個性」は、本稿を書くにあたっての大きな参考となった。特に尾藤正英「日本における国民的宗教の成立」を紹介しながら近世仏教の国民宗教化について論じた部分である。

第一に、日本における伝統的宗教は神道と仏教、それに民俗宗教を加えた三者が相互に影響しあって発展した。それが「一つの宗教」「国民的宗教」になって、民衆の間に普及・定着したのが、十五・六世紀のことであった。(註:儒教と仏教との関係は、すでに述べたので、ここでは述べない。)

第二に、「国民化」の実情についてである。仏教について言えば、一般に死者は仏式によって葬られ、供養を受けるが、死者をめぐる仏教儀礼は、その死者の属する「家」と、その家を保護者(檀那)とする菩提寺の関係(寺檀関係)に支えられていた。そのうえ、死者を葬った「墓」ないし「墓地」まで、その菩提寺に付属していた。神道の側で言えば、「集団としての地域社会」と密着して発展したのが神社を中心とする神信仰であった。庶民もそれぞれの村や町で地縁的結合の中心をなす神社をもっていた。そしてこれらの神社は、地域社会に住む人々の共通の氏神であると同時に祖先神でもあった。

第三に、「家」一般の形成という問題である。仏教信仰が主として個人としての死者に深く関係していたのに対して、神信仰は家結合としての地域社会にかかわっていた。

そしてこのような個人・家レベルにおける平等性や普遍性の意識を醸成する 上で重要な役割を果したのが、民俗宗教であり、死者儀礼や地域の祭礼・行事 を、長い時間をかけて育てた文化的母体がそれであったという。

さらに、武田聴州「近世社会と仏教」、岩波講座『日本の歴史』九、によれ

ば、日本の寺院のほとんどは十六~十七世紀の二百年間に創設されたものだという。この時期に創設された寺院には二つのタイプがあって、一つは地域の有力者(領主や武士的農民)が、その家の先祖祭祀のために屋敷内に設けた持仏堂、もう一つは、地域の住民が宗教的な集会を行うためにつくった惣堂である。その二つの「堂」にそれぞれ僧侶が定住するようになった時「寺」が誕生した。僧侶の所属宗派によって寺の宗派が決まり、その宗派の本山の末寺となることで「本末関係」が結ばれた。この寺は、葬式を司る菩提寺として機能し、死者の墓を併設するようになっていった。尾藤氏のいう「国民的宗教」のレベルで言えば、寺の創設がすなわち墓の成立を意味していたのである。こうして先祖の供養がいわば普遍的な形で民間に定着することになった。このような墓システムの浸透こそが日本仏教の変容を示すシンボルであり、また、その物的基盤ともなった。

以上が、システムとしての日本仏教の特質だとすれば、それがブラジルに伝えられた場合、そこにおいて、仏教は如何に定着し、機能するであろうか。

⑤ 本願寺の進出とプルデンテ地域の日系人社会

昭和 27 (1952) 年に東本願寺派の人の来伯が行われ、急に日本からの人の往来がにぎやかになったことは、「Y 日記」にもはっきりと現れている。

昭和17 (1942) 年,日本とブラジルとの国交断絶状態が始まって,その年の7月大使以下在外公館員が日本に引き揚げ,わずかに日本人権益部がサンパウロのスペイン総領事館内に設置され,日本移民は母国日本との関係を断たれ,その限りで日系人社会は閉塞状況に置かれた。昭和27年は,4月28日に対日平和条約が発効し,リオに大使館が、サンパウロに総領事館が再び開設されるなど,ブラジルの日系人社会が,第二次世界大戦中の敵国人としての閉塞状況から開放された年であり,同時に日本との多面的な関係が復活し出した年である。

8月には東本願寺法主大谷光暢および裏方智子のブラジル 巡 錫 が行われた。そのことは、個人の記録である「Y 日記」にも明らかに反映している。しかし、「Y 日記」の家計支出簿的性格からして当然のことであるが、その内容は支出金額によって表され、そこから直接に本願寺に対する心的関係を読み取ることは難しい。ただはっきりしていることは、法主夫妻の巡錫に際しての費用に対し多額の分担金を支払い、また寺への直接の寄付金といった支出が増

大し、その結果それまでと違った宗教関係支出が増大したことである。また、この支出に当たって、支出の主体が、戸主の YS 氏というよりも、YS 氏の父にあたる元戸主の YK 氏であることも注目される。

Y氏はすでに述べたように、母国の母村においては真宗系の門徒であった。したがって、本願寺法主夫妻のブラジル巡錫に対して、激しい共鳴を示したことは推測に難くない。ただし、そのような本願寺に対する心的共鳴を示した主体は、主に比較的高齢の一世の世代の日系人であったことは注目してよいだろう。本願寺側は、このような日系人一世の心的状況の上にたって、日本におけると同じような寺植関係をブラジルに復活・構築させる意図を持っていた。昭和29(1954)年に、当地の日系人の寄進によって、新たにプルデンテ市本願寺堂宇の建築が行われたことは、日記の中にも明らかである。

しかし、日本における菩提寺と檀那との寺檀関係は、菩提寺の所有する墓地 とそこに立てられた墓を媒介にし、他方檀那側の伝統的遺骨供養・墓信仰・墓 供養等の心的状況によって支えられ、成り立っていた関係であったはずであ る。しかし、ブラジルにおいては、墓地は公設墓地に置かれ、ブラジルのカト リックの墓観との見かけの類似性によって、日系人の墓信仰は違和感なくブラ ジル社会に受け入れられ、「フィナードの日」の墓参りとして適応・定着した。 その結果、少なくとも墓ないし墓信仰を媒介にした寺植関係は成立しようがな くなっていたはずである。寺が、プルデンテ地域の日系人地域社会の心的中心 たらんとすれば、他の道を求めることになる。「Y日記」に現れているかぎり でも、寺は、具体的には敬老会、青年会・女子青年会を組織し、結婚式場を準 備し、相撲興行を打つ等、広義の地域社会の中心としての機能を果たしだし た。特に勧進相撲は、母国日本の地域社会の文化に根ざした行事として注目さ れる。Y氏の母村では、かつて村の八幡宮の祭り(9月)には、村の青年団員 7~8人が世話をして、浪花節の会をやった。今は、のど自慢大会や耳納(み のう)太鼓になったという。その時に包む金一封を「花」といい、個人の有志 が贈り、昔はそれを個人宛にしたという。この村の風習は、「Y 日記」の中に 書かれた、寺で行われた相撲にも現れている。寺が、広義の地域社会の中心の 一つになりうる素地の一つを、ここに読み取ることができようか。

(以下次号)